

妙本寺蔵『いろは字』に於ける「和」注記について

橋村 勝明

一、はじめに

永祿二年日我の手になる字書『いろは字』⁽¹⁾には、「和ヨミ」「和語」「和辞」「和詞」「和コトハ」「和字(歟)」の注記が存する。本稿ではこれらの注記を便宜上総称して「和」注記とする。この「和」注記に関わつては、先に妙本寺本『曾我物語』において、「而」字を「サレバ」「サラバ」等のサ系語として訓読する事について、考察を行った。その際に『いろは字』に「而」字に「サレハ」が訓として記載され、傍らに「和ヨミ」注記が存することを指摘した。⁽²⁾しかし、「和ヨミ」注記が如何なる意味を有するのかを十分に解明出来なかった。

また、妙本寺本『曾我物語』において、「則」字を、多くの古辞書が訓として掲載しない「ヤガテ」と訓読することについて検討をした。その際『いろは字』に於いては「則」字と「ヤガテ」訓との関わりを指摘でき、その注記に「平家ニヨム」と有ることから、真名本である四部合戦状本との関係をも指摘した。⁽³⁾このことから、『いろは字』と真名

本の用字との間には何らかの関係性を有するものと考えられ、『いろは字』の文字に対する捉え方を検討することによつて真名本の用字法を考える手掛かりになるのではないだろうか。

そこで、『いろは字』に於いて「和」注記が付される漢字とはどのような漢字で、引いては「和」の意味するところは何か、ということについて検討してみたい。その方法として、まず「和」注記の存する漢字を記述し、それらと古辞書の掲載の有無を確認する。

二、「和」注記の存する漢字とその訓について

次に『いろは字』に於いて「和」と注記している項目を掲げる。「和」注記を、

- a、「和ヨミ」等と注すもの
- b、「和語」「和辞」「和詞」「和コトハ」とあるもの
- c、「和字(歟)」と注するもの

の三つに分類をした。これは、漢字と訓との関係性を問

題とするもの (a)、語そのものの性質を問題とするもの (b)、漢字そのものの性質を問題とするもの (c) という観点からの分類である。丸括弧内に記した片仮名は訓を示す。

a、「和ヨミ」等と注すもの

遠方 (アガタ)

明後日 (アサツテ)

死 (アサマシヒヘ)

不定 (アタナリ)

東 (アツマ)

東西 (アナタコナタ)

聳 (アブナヒ)

屹 (キツト)

誠 (ゲニモ)

螯 (サスガニ)

爾 (サテ)

惹 (サメク)

不更 (サラヌダニ)

不奈何 (サレドモ)

竜香舎 (フチツボ)

珍重 (モテハヤス)

躰 (ミヲヤツス)

瓢 (ユフカホ)

縁 (ユカリ)

娑婆 (ユラリクラリ)

b、「和語」「和辞」「和詞」「和コトハ」とあるもの

現々 (ゲニゲニ)

鑰 (エヒ)

会釈 (アヒシラヒ)

鐙踐張揃立拳 (アブミフンバリツ、タチアガリ)

然者 (サレバ)

坐々眊 (ザザメク)

早雨々々泣 (サメザメトナク)

吉良々々敷 (キラキラシク)

自東西東 (ユラリザラリ)

身毛弥立 (ミノケモヨダツ)

左乱足右乱足 (シドロモドロ)

抨満射徹 (ヒヤウツバトイトオス)

飛太々々 (ヒタヒタト)

c、「和字 (歟)」と注するもの

花月 (ヤサシ、)

鷺 (ゲニ)

富士籠 (フセゴ)

𦵏 (コ、ユル)

𦵏 (アヒガカリ)

𦵏等 (アレラ)

味豆 (アヂマメ)

木奴 (キヤツハラ)

油瀝 (ユラリ)

由良利乗 (ユラリトノル)

床敷 (ユカシク)

𦵏 (シツケ)

𦵏力 (エイヤツト)

𦵏 (モミヂ)

右に掲げた用例が古辞書にどのような形で記載されているのか、或いは記載されていないのかということについて纏めた表を以下に掲げる。

各項目について、古辞書 (名義抄・倭玉篇・節用集) と比較を行う。各古辞書に掲載されている状況によって、同字同訓であれば●、異字同訓であれば▲とする。又各古辞書の略称は次の通りである。

類聚名義抄⁽⁴⁾

↓観智院本 (観)・蓮成院本 (蓮)・高山寺本 (高)・

西念寺本 (西)・図書寮本 (図)

倭玉篇⁽⁵⁾

↓拾篇集 (拾)・玉篇略 (略)・米澤本 (米)・弘治

二年本 (弘)・玉篇要 (要)

節用集⁽⁶⁾

↓印度本六種 (印)

a, 「和ヨミ」等	観	蓮	高	西	図	拾	略	米	弘	要	印
遠方 (アガタ)											
明後日 (アサツテ)	▲	▲	▲								
死 (アサマシヒヘ)											
不定 (アタナリ)											
東 (アヅマ)											
東西 (アナタコナタ)	▲			▲					▲		●
聳 (アブナヒ)											
屹 (キツト)										▲	
誠 (ゲニモ)			▲							●	
𦵏 (サスガニ)										▲	
爾 (サテ)											
惹 (サメク)	▲	▲	▲								
不更 (サラヌダニ)											
不奈何 (サレドモ)											
竜香舎 (フチツボ)											▲
珍重 (モテハヤス)											
𦵏 (ミヲヤツス)	▲										

[illegible]

鰯	(アヒガカリ)
畝等	(アレウ)
味豆	(アヂマメ)
木奴	(キヤツハラ)
油瀝	(ユラリ)
由良利乗	(ユラリトノル)
床敷	(ユカシク)
躰	(シツケ)
団力	(エイヤツト)
枹	(モミヂ)

右の表から得られる結論は、『類聚名義抄』『倭玉篇』との共通性は極めて低いということ、そして『節用集』とは比較的共通する項目を見出すことが出来るが、それも全項目数47の内、▲ \parallel 10、● \parallel 4であり、これらの古辞書が用字或いは訓読のある種の規範を有するものであるとするならば、『いろは字』はそれとは又別の規範を有しているように窺える。

次に、真名本に於ける用例について検討をする。各項目について、妙本寺本『曾我物語』⁽⁷⁾（妙曾）・本門寺本『曾我物語』⁽⁸⁾（本曾）・内閣文庫蔵『源平鬪諍録』⁽⁹⁾（源）の全訓付訓語とを比較する。用例の片仮名は仮名点を、平仮名はフコト点を示す。尚、『いろは字』の記述と共通するものをゴシック体で記す。

a、「和ヨミ」等と注すもの

不定(アタナリ)

空 アタ(源五5才)

浮 アタナル(妙曾一7ウ)

東西(アナタコナタ)

𪛗方此方 アナタコナタ(本曾二8ウ)

𪛗方此方 アナタコナタに(本曾二21才)

𪛗方此方 アナタコナタへ(本曾四5ウ)

聳(アブナヒ)

浮雲 アフナクソ(本曾三23ウ)

浮雲 アフナシ(本曾一25ウ)

誠(ゲニモ)

現 ケにと(本曾二20ウ)

現 ケにと(本曾五6才)

現 ケにと(本曾六13才)

現 ケには(本曾五1ウ)

現 ケにモ(本曾六13才)

現乎 ケにモとヤ(本曾一24才)

螯(サスガニ)

流石 サスカニ(源八下6ウ)

差賀 サスカに(本曾二5才)

差賀 サスカに(本曾五27ウ)

差賀 サスカに(本曾六16才)

差賀 サスカに(本曾六17ウ)

差賀 サスカに(本曾四20ウ)

爾(サテ)

然 サテ(源五5ウ)

佐 サテコソ(本曾五9才)

惹(サメク)

張衣 サヤメイテ(源一下17ウ)

不更(サラヌダニ)

不而 サラヌタニ(本曾三25ウ)

縁(ユカリ)

類 ユカリ(源一下29ウ)

類 ユカリ(源一下31才)

縁 ユカリ(源一下35ウ)

縁 ユカリ(本曾五4才)

縁 ユカリ(本曾五4才)

縁 ユカリに(本曾六15ウ)

縁 ユカリの(本曾五10才)

尚、次のものについては、付訓された用例を見出すことが出来ない。

遠方(アガタ)明後日(アサツテ)死(アサマシヒへ)

東(アツマ)屹(キツト)不奈何(サレドモ)竜香

舍（フチツボ） 𦵑（ミフヤツス） 珍重（モテハヤス）
瓢（ユフカホ） 娑婆（ユラリクラリ）

b、「和語」「和辞」「和詞」「和コトハ」とあるもの

早雨々々泣（サメザメトナク）

小雨々 サメサメと（本曾三四才）

然者（サレバ）

而 サレハとて（妙曾二二才）

而 サレハ（本曾三二才）

而 サレハ（本曾二二才）

而 サレハとて（本曾三四才）

次のものについては、付訓された用例を見出すことが出来ない。

会釈（アヒシラヒ） 鎧踐張擗立拳（アブミフンバリツ、
タチアガリ） 鑰（エヒ） 吉良々々敷（キラキラシク）
現々（ゲニゲニ） 坐々咄（ザザメク） 左乱足右乱足（シ
ドロモドロ） 飛太々々（ヒタヒタト） 坪満射徹（ヒヤ
ウツバトイトオス） 身毛弥立（ミノケモヨダツ） 自
東西東（ユラリザラリ）

c、「和字（歟）」と注するもの

唆等（アレラ）

唆 アレ（本曾六九才）

唆 アレコソ（本曾二八才）

唆 アレハ（本曾一六才）

唆 アレヤ（本曾五一才）

団力（エイヤツト）

鼯 エイヤト（源八上三才）

木奴（キヤツハラ）

僕 キヤツカ（源八下五才）

奴 キヤツ（本曾二三才）

鴛（ゲニ）

現 ケにと（本曾二二才）

現 ケにと（本曾五六才）

現 ケにと（本曾六三才）

現 ケには（本曾五一才）

現 ケにモ（本曾六三才）

現乎 ケにモとヤ（本曾二四才）

艳（モミヂ）

葛 モミチ（本曾一八才）

葛葉 モミチハ（本曾二一才）

葛葉 モミチハ（本曾二八才）

花月（ヤサシ）

珍重 ヤサシク（本曾一18才）

昵 ヤサシける（本曾四11才）

珍重 ヤサシケレ（本曾五24ウ）

次のものについては、付訓された用例を見出すことが出来ない。

味豆（アヂマメ） 礪（アヒガカリ） 躰（コ、ユル） 躰（シツケ） 富士籠（フセゴ） 床敷（ユカシク） 油瀝（ユラリ） 由良利乗（ユラリトノル）

右の結果によって、「和」注記が付された漢字と訓との関係は、古辞書同様真名本によっても容易に見出せるものではないことが指摘出来る。従って、『いろは字』と真名本の用字法との関係性は、「和」注記を有する漢字については希薄なのであり、真名本の用字法或いは訓読法は、『いろは字』から観察する限りに於いて伝統的な方法を主体として一部「和」注記を有する用字法或いは訓読法を含むと考えられる。

そもそも、「和」注記が付されている語を概観すると、

①オノマトペ 娑婆（ユラリクラリ）等

②熟字訓 珍重（モテハヤス）等

③中世以降成立の語 木奴（キヤツバラ）等

が多数含まれており、これらについては従来の漢字と訓との関係では表記し難かったものと考えられる。右のことから、本来の伝統的な漢字と訓との結びつきとは異なる、日本独自に創造した新たな結びつきを「和」としたのではないだろうか。そしてその結果『いろは字』の「和」注記が付された語は他の古辞書、真名本との共通性が見出されないのではないか。

三、まとめ

妙本寺蔵『いろは字』の「和」注記について、その意味するところを検討した。その結果、和訓の語種やその他の属性に依る注記ではなく、漢字と訓との新たな関係性に着目した注記であることを結論として得た。このことは、例えば『異体字弁』に於いて、「和俗字」という項目を立て、国字を収めることから窺い知ることが出来る。

しかしながら、『いろは字』に掲載される、漢字と訓との結びつきの由来や広がりについては、検討することが出来なかった。例えば、「珍重」の熟字訓としては、『いろは字』では「モテハヤス」であるが、妙本寺本『曾我物語』（一18才）では「ヤサシク」であり、又同じ真名軍記である『大塔物語』でも「ヤサシ」と訓ずる。これらの事柄からは、同一の漢字を一回的に訓むのではなく、ある程度の訓のグルー

プが存するようである。

今後の課題としては、「和」注記を有する漢字以外の、漢字と訓との関係性と真名本のそれとについて検討する必要がある。又、個々の漢字と訓との結びつきがどのような着想に基づくのか、又それがどのような広がり或いは一般性を持つのか、ということについて検討することが残されている。

(1) 鈴木博著『妙本寺蔵永祿二年 いろは字 影印・解説・索引』(清文堂、昭和四九年五月) による。

(2) 拙稿「中世真名本に於ける「而」字の用法と訓とについて」(『鎌倉時代語研究』第二二輯、平成一一年五月)

(3) 拙稿「妙本寺本曾我物語における「則」字訓について」(『国文学攷』一五七号、平成一〇年三月)

(4) 草川昇編『五本対照類聚名義抄和訓集成』(汲古書院、平成一二年一〇月) による。

(5) 北恭昭編『倭玉篇五本和訓集成』(汲古書院、平成六年三月) による。

(6) 中田祝夫著『印度本節用集古本四種研究並びに綜合索引』(勉誠社、昭和四九年三月) による。

(7) 山岸徳平・中田祝夫解説『真名本曾我物語』(勉誠社、昭和四九年一〇月) による。

(8) 国会図書館蔵本の紙焼き写真による。

(9) 山下宏明編著『未刊国文資料 源平闘諍録』(未刊国文資料刊行会、昭和三八年三月) による。